



「独立自尊」の精神が今に生きる わが国最古の私立小学校

慶應義塾幼稚舎

慶應義塾幼稚舎の歴史は1874(明治7)年、福澤諭吉の高弟の一人、和田義郎により慶應義塾構内に開かれた私塾「和田塾」に始まります。わが国の近代化に多大な影響を及ぼした福澤諭吉の教えのもと、150年に及ぶ歴史を刻むわが国最古の私立小学校の一つ、慶應義塾幼稚舎の魅力をご紹介します。

大学通信 代表取締役社長
田所 浩志

「今日子供たる身の独立自尊法は
唯父母の教訓に従て進退す可きのみ」
——この言葉は、慶應義塾の創設者である福澤諭吉が1900(明治33)年に揮毫し、幼稚舎生に示したものです。慶應義塾幼稚舎では、この書を入学式や卒業式に掲げて、福澤諭吉の教訓を今日にまで伝えています。
創設以来、160年を超える歴史を刻む慶應義塾の起源は、1858(安政5)年、江戸築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内(現在の東京都中央区明石町)に誕生した蘭学塾に遡ります。当時、福澤諭吉はまだ23歳という若さでした。こうして「全社会の先導者たらんことを欲するものなり」という熱い気概のもと、志高い幾多の人々を門下に集め、近代日本国家の建設をリードしていきました。

その後、慶應義塾は12歳から16歳までの生徒を預かる寄宿舎として「童子局(童子寮)」を設けます。しかし、自身も四男五女の子を持った福澤は、より年少の子どもたちの教育を任せる教員の必要性を感じ、全幅の信頼を寄せる高弟の一人、和田義郎に思いを託しました。これを受け、1874(明治7)年、和田が塾生の中でも最も若い者数名を慶應義塾構内にある自宅に寄宿させ、夫婦で教育を行ったのが慶應義塾幼稚舎の始まりなのです。

「独立自尊」「社中協力」など 福澤精神を受け継ぐ幼稚舎の魅力

福澤諭吉がその歴史的著作『学問のすゝめ』において、人間の自由と平等、権利の尊さを説いたこと、あるいは

門下の高弟らとともに編纂した『修身要領』に、「独立自尊」の言葉を遺したことなどは周知の通りです。幼稚舎の教育理念は、校歌である『幼稚舎の歌』に歌われている、「みさとしを身に行なう」こと、即ちこの「独立自尊」の教えを実践できる人材を育成することにあります。

その福澤精神を受け継いだ幼稚舎の人気のほどは、少子化がこれほどまでに騒がれる中、多くの入学志願者を集めていることから明らかでしょう。親子2代が同じ慶應義塾で学ぶ、あるいは3代、4代が「同窓生」であるという例も珍しくないのが慶應義塾の特色の一つです。

徹底した一貫教育制度をはじめ、前述の「独立自尊」に加え「社中協力」、さらには「半学半教」など卓越した独自の特色が、慶應義塾の出身者に「自らが体験した学生生活の充実感や感動の体験を、自分の子どもにも味わわせたい」と感じさせているのです。

強靱な身体と豊かな情操を培う 独自の行事とカリキュラム

福澤諭吉は「まず獣身を成して、のちに人心を養う」と唱えました。そこで、幼稚舎では昔から身体能力を鍛えることに力を入れています。夏は水泳一色に染まり、秋は運動会や体力測定、校内大会と、胸躍る行事が続きます。冬には全校で毎朝の駆け足が行われるほか、縄跳びの記録づくりも盛んで、記録への挑戦、そしてそこで得られた達成感は、元慶應義塾長である小泉信三の言葉「練習は不可能を可能にする」を体得する機会ともなっています。

また、文化行事では毎年9月下旬、1年生から6年生までの各教室に児童たちのさまざまな作品が展示され、さながら学校全体が美術館のようになる作品展をはじめ、12月上旬には音楽会、さらには2月下旬、幼稚舎最大の行事と言える学習発表会も開かれます。1年生が歌詞を6番まで覚える『福澤諭吉ここにあり』の大合唱は、一生忘れることのない大切な思い出となるでしょう。

さらに、希望者を対象として、毎年3月には静岡県修善寺にある「幼稚舎の杜」へ出かけ植林をする行事や、夏休みには福澤諭吉が生まれてから江戸に出るまでに過ごした場所である大阪・中津・長崎を訪問する「福澤先生のゆかりの地を訪ねる旅」などの特色ある活動を実施。英国オックスフォードのドラゴンスクールとの交流、米国ニューヨーク郊外のモホーク・デイ・キャンプに参加、英国サマースクール、米国ハワイのプナホウスクールとの交流という4つの国際交流プログラムも用意しています。
一方、授業面では、「6年間担任持ち上がり制」を採



用しているのが大きな特徴です。6年間クラス替えがなく、担任は6年間を通してクラスの児童一人ひとりの成長を見守り、細やかに対応します。担任にはかなりの自由度が委ねられており、児童たちと深い信頼関係を築きながら、情熱をもって授業を展開しています。

一方で、理科や音楽、絵画、造形、体育、英語、情報などについては、1年生から専門性の高い教員が担当する「教科別専科制」を採用し、それぞれの教科を通じてさまざまな学びと成長を促すよう工夫が講じられています。

このように、以上の2つの制度を教育の両輪として、幼稚舎では子どもたちに豊かな学びと成長を促す機会を提供しているのです。

2024年の創立150周年を機に 学校改革をさらに推進

慶應義塾には、中学校として普通部(横浜市・男子)と中部部(港区・共学)のほか、湘南藤沢キャンパスに中高一貫の湘南藤沢中部部・高等部(共学)があり、幼稚舎の児童は3校(女子ならば2校)ある中学校のどこに進学するかを自由に選択することができます。高等学校としては慶應義塾高等学校(横浜市・男子)、慶應義塾志木高等学校(志木市・男子)、慶應義塾女子高等学校(港区・女子)に加え、米国ニューヨーク州に慶應義塾ニューヨーク学院(共学)が設置され、最終的には高校卒業者のほとんどが、内部推薦で慶應義塾大学に進学します。大学の各学部で学ぶにふさわしいかどうかは大学が判断するのではなく、各高校がそれぞれ独自の選考に基づいて推薦を行っています。

慶應義塾幼稚舎では、昨年度2024年に迎えた創立150周年を一つの契機として、将来を見据えた上での校内環境整備やカリキュラムの見直し、ICTに対応した教育の拡充、クラスを分割した少人数制授業の実施など、新たな学びの手立てを加えていきたいとしています。これまでの歴史や伝統、福澤諭吉の教えを大切に守りながらも、常に進取の精神を持ち、次代を切り拓く新たな学校づくりを意欲的に目指していこうとする姿にこそ、慶應義塾の尽きせぬ魅力が現れていると言えるでしょう。